

ノンフィクション劇場

## 石井忠雄作 「見えない糸に導かれて」

### <前編>「ギャンブル人生」

- 仲間                    おい渡辺、ゆうべのポーカー、どうだった？
- 渡辺佐次郎            おれか？ 大当たり。200ドルもうけたぜ。
- 仲間                    おれはダメだった。スツテンテンになっちゃったよ。それにしても200ドルかい？  
72,000円じゃないか。兵隊の給料の2か月分だぜ。すごいな。
- 妻良子ナレーション   あれは1955年、今から33年前のことでした。そのころ、わたしの主人はまだ  
独身で、新潟県の佐渡にあるアメリカ空軍のレーダー基地に勤めていました。  
基地での生活は、兵隊の宿舎に寝泊まりし、そこから勤務に出る毎日でしたが、夜、仕事が終わると、宿舎のあちこちでダイスやポーカーなどが始まり、  
多くのお金が動きます。主人も、その中で、給料の大半をバクチで費やしてしまうこともあり  
ました。もちろんそのころは、キリスト教への関心など少しもありませんでした。
- 佐次郎                    おい、あいつらは何だい？
- 仲間                    ありゃ礼拝に出る兵隊じゃないか？
- 佐次郎                    礼拝っていうと、キリスト教なのか？
- 仲間                    操作。月に1度、横田のベースからチャプレンが来るのを、お前知ってるだろ  
う？
- 佐次郎                    うん。でもご苦労なこったな。せつかくの休みだっていうのに。
- 仲間                    お前なんか、行ってざんげでもしてきたほうがいいんじゃないか？ 心が清くな  
って、見違えるようになるぜ。
- 佐次郎                    バカ言え。おれはおれで立派に生きてらァ。宗教の世話になるほど落ちぶれ  
ちゃいないさ。それに、こんなに面白い遊び、やめられるかよ。
- 仲間                    しかし、こんなことしていて、おれたちどうなっちゃうんだろうな。それに、この基  
地もそろそろ日本の自衛隊に引き渡され、閉鎖しちゃうってうわさだぜ。
- 佐次郎                    おい、そんなこと、どこで聞いたんだ？ ここを閉鎖されちまっちゃァ、おれたち、  
飯の食い上げだぜ。
- ボンソン少佐            ミスター渡辺、元気ですか？ ちょっとこれを読んでください。
- 佐次郎                    あ、司令官。何ですか、これ？
- ボンソン少佐            いいから読んでみてください。そしてもし何か質問があるなら、いつでもわたし  
のところに来なさい。お話をしあげから。
- ナレーション            それは、この基地の司令官をしているボンソン少佐でした。少佐は、いつも何  
かポケットに入れていて、配っていたのです。そのころの主人には、司令官

自らなぜそんなことをするのか分かりませんでした。

佐次郎 何だい、これは？

仲間 キリスト教について書いてあるパンフレットだよ。おれもこの前もらったよ。

佐次郎 何を書いてあったんだ？

仲間 知らない。読んでねえから。

佐次郎 ふーん、何々？ …「もし私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちを清めてくださいます。ヨハネの第1の手紙1章9節」…。なーんだい、これは？

ナレーション そのころの主人には、聖書の言う“罪”とは、何のことか分かりませんでした。時には飲み代を踏み倒したり、悪いことも結構していましたが、警察ざたになっただけではありません。多少人が困ったって、自分がよければそれでいいと思っていたのです。そんなころ、わたしは同じ基地に勤めていて、主人と知り合い、やがて結婚し、子供も与えられました。

佐次郎 おい、とうとう基地が閉鎖するそうさ。

良子 え、じゃあわたしたちの生活はどうなるの？

佐次郎 とりあえず何か仕事を探さなけりゃな。

良子 わたし、親子ともども路頭に迷うなんてイヤよ。でもこの町じゃ、これって働く場所もないし。

佐次郎 東京に行くか。

良子 東京？ 東京で何か当てでもあるの？

佐次郎 ちょっと司令官に頼んでみる。ジョンソン空軍基地で働くことができないかって。

ナレーション ボンソン少佐は、主人を埼玉県入間市にあるジョンソン空軍基地に快く紹介してくださり、その洗濯工場で働くことになりました。しかし、生活は決して楽ではありませんでした。佐渡の基地で覚えたギャンブルの味が忘れられなかったのです。

良子 あなた、今月のお給料どうしたのよ。

佐次郎 すまん。なんとかするからもう少し待てよ。

良子 もう少し待って、いつもそうじゃない。子供2人抱えて、わたしたちどうしたらいいの？ もうバクチはやめてよ。

佐次郎 何言ってるんだ。損する時ばかりじゃないさ。この前みたいに、大もうけすることだってあるだろ？

良子 でも、それを飲んじゃうんじゃしょうがないでしょ。

佐次郎 そうだよな。うん、そうだ。この間、兵隊から士官クラブのバーテンのアルバイトを紹介された。そこで稼いでくるからさ。今度だけは、な？

ナレーション 東京での生活が始まったものの、田舎と違い、基地からの給料だけでは生活

ができません。それで、主人は通常の勤務のあと、週3回、基地内の士官クラブのバーテンを始めました。主人は、英語が話せたこと、15人くらいのオーダーを全部覚えていて、それぞれのお客に間違いなく、注文されたものを届けたことなどで、将校から多くのチップをもらいました。ちなみに当時は、日本の従業員にチップをやってはいけない規則があったそうです。

そんなある日、基地で一人の女性が話しかけてきました。

女性 渡辺さん、ひとみちゃんのお父さんでしょ？

佐次郎 はい。あなたは？

女性 ええ。わたし、ひとみちゃんの通っている教会幼稚園の教会学校の教師をしている者です。いつかお話ししようと祈っていたのです。日曜日にはご家族で、ぜひ教会にお出かけくださいな。お待ちしております。

佐次郎 教会ですか？ 娘はキリスト教の幼稚園にやっていますが、わたしは教会に行けるような人間じゃないですよ。

女性 だからこそ、いらしてほしいのです。

佐次郎 いや、わたしは堅苦しいことは嫌いですから。

ボンソン少佐 ミスター渡辺。

佐次郎 あ、少佐！

ボンソン少佐 わたしからもお願いします。ぜひ教会に行ってください。

ナレーション それは、ボンソン少佐でした。彼も佐渡からジョンソン基地に来ていました。それから主人は、娘のひとみの教会学校の先生とボンソン少佐から、会うたびに教会に誘われる羽目になってしまいました。しかしその一方で、トランプで想像もつかないほどの金額を懐に入れていたのです。

そんなある日のことでした。

佐次郎 イテ、イテテテ！ チ、チクショー、いてえ。

ナレーション 主人は、突然の腹痛に襲われたのです。長い間の過労と不摂生がたたったのでしょうか。ついに胃かいようで入院し、手術を受けることになりました。

良子 あなた、大丈夫？

佐次郎 なんだか怖い。とても不安だよ。良子、そばにいてくれ。

良子 わたしはいつもそばにいるわよ。

佐次郎 おれ、どうなっちゃうんだらう。ああ、神様、あなたが本当にいるのなら、どうか助けてくれ。丈夫な体にしてください。

ナレーション 今まで神様なんて言葉を口にしたことなかった主人ですが、その時、何も知らずに心の中で祈っていたのです。どんなに強がっても、本当に人間は弱いことを知らされたのだと思います。そして、その祈りが聞かれたのでしょうか。主人は、見えざる神のみ手に守られ、手術は無事に終わりました。

良子                   あなた、よかったわね。ほら、ひとみも肇も来ているわよ。

佐次郎               心配かけたな。おっ、みんな元気そうだな。もう安心していいぞ。これからバリバリ働いて、少しは楽させてやるからな。いつごろ退院できるのかな。

良子                   4月末になるんじゃない？

佐次郎               そうか。もう3か月以上も休んでいるからな。良子、お前にも心配かけたな。おれ、これから頑張るかなら。

ナレーション       主人の胸は、夢と希望で膨らんでいました。今度こそ、わたしたちにも春が来るような感じがしました。ところがその矢先のことでした。今まで勤務していた基地から、こんな連絡があったのです。

人事担当兵         ミスター渡辺。あなたは、もうベースに来なくていいです。

(音楽)

ナレーション       わたしたちの目の前は真っ暗になりました。

<後編>

ナレーション       ジョンソン基地解雇は、立ち直ろう著していた主人に大きな打撃を与えました。「本当に神様はいるのか？ いるならなぜ自分たちは、こんな苦しみに遭うのか？」と思ったそうです。こうして主人は失業し、家で過ごすようになり、やがて退職金も底を突き、失業保険の給付も終わってしまいました。2 人の子供を抱え、わたしは働きに出ることになりました。

良子                   ひとみ。肇と仲良くしているのよ。お母さん、お仕事に行ってくるからね。

ひとみ               うん。でもお母さん、早く帰ってきてね。わたしたち、お母さんいないと寂しい。

ナレーション       こんな子供の声を聞くと、心が痛みます。そんなある時――

佐次郎               良子。今日、いい働き口があつてね、面接を受けてきたよ。

良子                   どんな会社？

佐次郎               観光開発会社なんだけど。そこでちょうど国際課っていうのを設けて、外国人相手に土地を売るんだって。おれ、英語が話せるって言ったら、すぐ採用さ。今度こそバリバリ働かせ。

良子                   よかったわね。でも今度はあんまり無理しちゃダメよ。

佐次郎               うん、分かってる。今度こそまじめに働いてみせるよ。

ナレーション       再び元気に働き始めた主人を見て、わたしの心には喜びと希望があふれてきました。

会社の部長         渡辺君。今度、この那須の別荘地の分譲を担当してくれよ。君ならきっとできる。

佐次郎               こんな辺りな所が売れるんですか？

部長                   売れるかじゃなくて、売るんだよ。外人さんは金があるから、うまくもっていけば大もうけができるというものさ。

佐次郎           しかし、何と説明すればいいのかなあ。こんな交通の不便な場所。

部長              君。金もうけにはね、正義もへったくれもないんだよ。ウソをついたって何したって、契約さえしてしまえばもうこっちのものなんだから。

ナレーション    主人は苦しんだようです。しかし、生活のためには仕方ありません。それに、今までのブランクを取り戻そうという思いがあって、知り合いの外国人のつてを頼って訪問をしました。

佐次郎           スミスさんは、別荘を探しておられると聞いていますが、今度、わたしどもが売り出した那須の別荘はいかがですか？

スミス           どんな所ですか？

佐次郎           とても静かな所で、これから開ける場所ですよ。

スミス           ずいぶんと交通の不便なところのようですが。

佐次郎           もう1年もすれば、新しい道路ができて、東京から数時間で行くことができますよ。そうなれば、もうこの値段では買えませんよ。

ナレーション    主人はこのようにして、実績を上げるため、ウソもつきましたし、強引に契約をさせたりしました。その努力が実り、1年足らずで課長の地位に就くことができました。わたしたちは、このために生活も安定してきました。そして、人間、努力すれば、自分たちの幸せを手にすることができると思いました。こうして、すべてが順調に行っているように見えたある日のこと、主人は部長に呼ばれました。

部長              渡辺君。君は大変よくやってくれて、感謝しているよ。ところで最近、何か変わったことはないかね？

佐次郎           変わったことと言いますと？

部長              うん。君の部下の木村君のことだがね。

佐次郎           彼はまじめにやってくれています。

部長              それならいいんだが。この仕事は誘惑の多い仕事だ。いつなんどき間違いを犯すかもしれん。上司として十分気をつけたまえ。

佐次郎           部下を疑えてことですか？ 上司と部下に信頼関係がなかったら、仕事は任せられませんよ。

部長              よし、それならいいんだ。わたしの取り越し苦労かもしれん。

ナレーション    主人は、“自分が目をかけている部下が、間違いを犯すなんて”、と思いました。しかし、“もしや”という思いもあって調べてみました。

佐次郎モノローグ    おや、これはまだ契約していないはずなのに、本契約になっているぞ。じゃあ、この分のお金はどうなっているのかなあ。木村が着服なんて、まさか、あいつに限って…。

ナレーション    しかし、悪い予想は的中しました。

部長              渡辺君。君の監督不行き届きじゃないのかな？ 木村君は、社判の押しであ

る書類を勝手に持ち出して契約し、その代金を持ち逃げしたんだよ。君も責任を取ってもらうからね。

ナレーション このことは、主人にとってもわたしにとっても本当にショックでした。仕事がやっと軌道に乗ってきた時に、一体どうゆうことになるのかと思いました。でも幸いなことに、会社の処分は減給で住みました。しかし主人は、ある日、突然、こんなことを言ったのです。

佐次郎 おれは、今の会社を辞めることにしたよ。

良子 なぜ？ 減給になったって、今までのように生活できるのにどうして？ 会社のほうだって「来てほしい」って言っているんでしょう？

佐次郎 でもおれは、自分がつくづく嫌になったんだよ。ゼロからやり直したいんだ。

良子 どういうこと？

佐次郎 実は、おれ、この間、ボンソンのところに行ってきたんだよ。

(音楽) (回想)

佐次郎 ボンソン少佐。どうしてわたしのところの電話が分かったんですか？

ボンソン いや、ミスター・ワタナベのことが気になってね。いろいろ調べたよ。それに、わたしはもう少佐じゃない。退役して、今は御茶ノ水学生キリスト教会館で働いているんだ。

佐次郎 それはどんなところなんですか？

ボンソン 日本の若者に、イエス・キリストの福音を伝えて、本当に意味のある人生を送ってもらう働きをしているところだ。

佐次郎 そう言えば、佐渡にいたころ、あなたに頂いたパンフレットに書いてあった言葉を、この間ふと思い出しました。えーと、それは「もし私たちが、自分の罪を言い表すなら、構いは真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちを清めてくださいます。」

ボンソン 報、よく覚えたね。でも、どうしてまた思い出したんですか？

佐次郎 それは、先日、わたしの部下がわたしを裏切って、罪を犯したのです。わたしは信頼していただけに、その部下を赦すことができませんでした。そして、怒りと憎しみの入り混じった気持ちで、「とんでもない野郎だ」と一方的に彼を裁いていた時、わたしはなぜかこの言葉をふっと思い出したのです。わたしも部下と同じように罪があるのではないか、そう思うと、わたしの目には、仕事のためとはいえ、次から次と人をだましては、利益をむさぼっていた自分の姿が浮かんできました。その時、わたしは、罪びととは、他人のことではなく、ほかならぬ自分のことだと気づいたのです。

ボンソン そうですか。とても大事なことに気がつきましたね。でも、それだけでは不十分なのですよ。

佐次郎 と言いますと？

ボンソン わたしたちは、自分の罪に気づいても、それ以上自分ではどうすることもできないでしょう。

佐次郎 ボンソンさん、どうすればいいんですか？ わたしはもう、自分自身が分からない。

ボンソン イエス様は、あなたのその罪を赦すために、2 千年前に十字架であなたの身代わりとなって死なれたのです。あなたは、それを知らなければなりません。そして、知ったら、イエス様を自分の罪の救い主として、心に受け入れるのです。イエス様が、あなたを変えて、本当の人生を送らせてくださいます。ミスター・ワタナベ、あなたは、自分の救い主として、イエス・キリストを受け入れますか？

佐次郎 わたしは、今まで宗教とは無関係でしたし、わたしみたいにいろんな罪に汚れている者なんか、神様の前に立つことができないと思っていました。でも、お話を聞いていて、わたしの本当の姿を示され、それでもなお受け入れてくださる神様の愛を感じました。信じます。イエス様を信じ、受け入れます。

ボンソン ミスター・ワタナベ、長い間、あなたのために祈っていました。よかった。本当によかった。…ところで、わたしの仕事を手伝う気持ちはありませんか？

佐次郎 わたしみたいんでよかったですら、どうかやらせてください。

(音楽)  
(元の場面に)

佐次郎 …というわけなんだ。良子、今まで、君にも子供たちにも迷惑をかけてきた。子供たちも小さく、これからというときに仕事を変えるのは不安だ。給料だって、今の4分の1になってしまう。しかし、イエス様が一緒だ。君も信仰を持って一緒に働いてくれないか？

ナレーション わたしは、一瞬ビックリしました。そんなことが本当にできるのだろうか。しかし、わたしたちは主人の決断に従って、1966 年2月の寒い日に、お茶の水に引越しました。わたしは若いころ、カトリックの教会に通っていたことがあり、キリスト教の教理については、少し知識がありましたが、主人と初歩から学びなおし、やがて夫婦でバプテスマ・洗礼を受けました。それ以来皆さんには、通称“ミスター”“ミセス”と呼ばれ、22 年の歳月を、ここお茶の水学生キリスト教会館で働かせていただけてきました。主人はよくこう言うんです。

佐次郎 わたしたちは、始め自分たちの楽しみのために生活を始めたけれど、それがどんなもろいものかを体験してきたんだよ。そして、たどり着いたのが、“神と人に仕えること”。今にして思うと、あのギャンブルに明け暮れていたころから、わたしたちは神様の見えない糸に導かれていたような気がするんだ。そこに至るまで、ミセスにはずいぶん苦勞をかけたけど、2 人が神様の導きに従って歩んだときに、不思議に必要が満たされた。今、わたしは、確信を持って言えるね。「イエス様第一に歩むとき、苦しみの中でさえ、平安が与えられ、喜び

ナレーション

一杯に生きることができるんだ」ってね。  
わたしも、ほんとにそう思います。

<完>